

Title	ヘイ・オン・ワイとブックタウン運動
Sub Title	
Author	熊田, 俊郎(Kumada, Toshio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.3- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 古書流通から見た地域社会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘイ・オン・ワイとブックタウン運動

熊田 俊郎

はじめに

古書店とは何かというと意外に難しい。日本では古書店を開業するのに特別な資格は不要である¹⁾。主要な古書店は組合に加入しているが、組合に入らない業者もいる。各地で行事として行う古書市にはフリーマーケットのようにテンポラリーな営業形態もあるし、リサイクルショップの片隅に本が並べられていたり、さらには駅の物陰で古雑誌を売のような形態まで考えようによっては古書を扱っている。近年インターネット古書店が増加する傾向にある。英国ではオークションを中心とするアンティークとセカンドハンドに古書を大別するが、日本でも基本的には同じである。

古書店のさまざまな形態をあえて示したが、恒常的に店舗を構えるような古書店は人口2～3万人当たり1軒の割合で成り立つ普遍的な業態である²⁾。単純に言えば、30軒の古書店があるなら60万人の人口が必要である。ところが人口高々1800人程度の、鉄道もなく大都市との間に長距離バスもほとんどない田舎町に30軒もの古書店が集積していることが英国、ヘイ・オン・ワイの特異性である。ヘイにはじまるこうしたまちづくりが、ブックタウン運動としてヨーロッパの20以上のまちに広がり、アメリカや日本にも呼応する動きがある。以下ヘイの現状の紹介と若干の考察からはじめたい。

1. ヘイ・オン・ワイ

ブックタウンとしてのヘイ・オン・ワイは、R.ブース氏という強烈な個性を持つ人物に負うところが大きい³⁾。

ヘイの町は城砦が築かれることからわかるようにウェールズ・イングランドの接点で戦略的要地であった。またバターを扱うマーケットタウンとして地方の中心地であったようである。18世紀には鉄道（当時は馬車鉄道）も引かれるなど経済活動も活発であったが、近代化・工業化の波から取り残され、さびれ、1960年代には鉄道も撤去された。ブース家はもともとヘイの地付きではないが、軍人の伯父夫婦が引退後の居所としたことがきっかけで住むようになった。ブースはオクスフォード大を出て古書の取り扱いを始めた。1962年にも消防署の建物を買って古書店としたところからブックタウンとしてのヘイの歴史は始まる。その後蔵書置き場を確保する意味もあって城館（キャッスル）を買って、そこは現在もブースの書店となっている。

その後の重要な出来事として、1977年4月1日のヘイ・オン・ワイの英国からの独立宣言

がある。ブース自ら国王に「即位」し、貴族の叙任などをした。ミニ独立国の走りのようなものであるが、これに地元議会が否定宣言をするなど話題となった。なおこのころからブースと地元の行政との関係は悪化したようである。

ブースが活動を始めた時期、英国は資産家の没落の時期に当たり、マナーハウスなどに必ず備えられている蔵書 **library** をはじめ、修道院、大学などの蔵書を片っ端から買い集めたようである。ただし本人は経営の才に欠けるところがあるらしく、何度も経営が行き詰まっては店舗を手放している。ある意味では皮肉なことに書店を手放すことによって新規の古書店が増えたという側面もある。著書の中で悪し様に言っているのはこうした売却先である。ブースのもとで修行した人たちが独立して古書店を開いているケースが多くみられる。こうして現在、ヘイの町には 30 軒以上の古書店がある⁴⁾。また古書店とともに十数軒のアンティークショップがある。

現在世界中から人を集める本の祭典・ヘイフェスティバルが、毎年 5 月に開催されている。これは新刊書の祭典で、テレビ局がスポンサーになり、近年にはクリントン元大統領や J.フォンドなど著名人を招いて英国内でも大きく報道されたこともある。場所もイベントが大きくなりすぎてヘイの広場では開催できず町の外になっている。現在これにブースは参加しておらず批判している。この点でもブースは地元の動きと対立をしている。

2. ヘイをめぐる若干の考察

ヘイについて考える場合、個人的側面、歴史的（時代的）側面、社会経済的背景について考えなくてはならない。個人的側面について、ブースの強烈な個性がなければブックタウンははじまらなかった。これは必ずしも経済合理性のみで起業したのではない、場合によっては非合理的熱意も含め何らかの事業を起こし、それが社会経済的条件に合うことによって発展する。筆者はこれを「情念による起業」と呼んでいる⁵⁾。本人によれば「本を読むような人間は一人もいない」ヘイの町で書店を起こしたことからしてそうである。「新刊書は **domestic economy** であり、古書は **international economy** である」という一見意味不明の言説からも、大資本に反感を持つ 60 年代的精神が窺える⁶⁾。これがブースの活力ともなっている。またブースは希代の宣伝上手である。ヘイ独立宣言はばかばかしさとともに地元との軋轢を生むが、それも話題づくりに生かしてしまうところがある。マスコミを動員して知名度を上げることに成功する。

歴史的側面として、ブースが活動を始めた時期は英国の伝統的資産家の没落期に当たり、在庫の質的価値を高めることに成功したことが挙げられる。これは日本の神田神保町の一部書店が、戦後経済改革の中で旧華族層を中心とする蔵書を扱うことで地位を確立することと似ているともいえる。

社会経済的背景について、まず「ヘイでなくとも良いがヘイのようなところでなければならぬ」ということが言える。古書業は在庫のための大きな倉庫を必要とする。ブースがキャッスルを買い取ったのも在庫の置き場の必要があったからである。田舎であるために安価に倉庫

類似の施設を入手できる。われわれもブース氏が倉庫として使っている建物に案内されたが、かつて豚の飼育小屋として使われていた建物であった。ヘイで古書店が次々と開業したことについては、ブースの教育的機能が大きな役割を果たす。ブースと袂を分かち人たちも含め、ブース書店で修行して独立するケースが多い。またある意味でブースが経営に失敗することで別の人間が事業を買い取って独立することもある。また日本にない英国の事情として不動産の流動性が確保されていることが挙げられる。たとえばアメリカ出身の P.コリンズは開業に当たってどのように不動産を入手するか書き残している⁷⁾ が、日本の同規模の田舎町では考えられない。

もう一点、古書の町にかかわる人にヘイ出身者が少ないことである。ブース自身半分余所者の側面がある。ヘイの 30 数軒の書店経営者のうち、ヘイ出身者は一人だけであり、実質的にその書店を切り盛りしている妻はイングランドからブース書店で修行するためにやってきた人物である。またブース主催のパーティーに参加したところ、ヘイ出身者は少なく、「ロンドンから引退の地としてここを選んだ」というような人が多かった。

英国で、bookshop の減少と bookseller の増加を言う人がいる。ヘイにはインターネット専業の古書業者もあり、既存 shop 経営者もインターネット販売を増やしている。このことも大都市に拠点をおかずに済む理由の一つである。

行政とのかかわりおよび業者団体であるが、ブース氏の周囲を見る限り行政の影は見えない。むしろ地元開発局や地元カウンスルとの対立などの側面が目立つ。しかしヘイは大勢の観光客により支えられている。観光客（ヘイは国立公園ブレコンビーコンの観光基地の位置にある）は買い物が重量のある書物ということもあって、自家用車で訪れる人がきわめて多い。以前より拡張したという広い駐車場や案内所（インフォメーション）の整備など行政や自治体に頼らずに事業は完結しない。ブースに代表される古書店の側も、行政を非難しながら持ちつ持たれつしている様子がみてとれる。なおヘイに古書店の業界団体はあるというが、親睦会の域を出ないようである。

3. ブックタウン運動と日本

ヨーロッパに広まるブックタウンであるが、中には実態に乏しいものもある。ヘイは南ウェールズの旧産炭地に近く、その近くの町ブレナヴォンは「ブックタウン」と看板のある寂れた町であった。一方で交通不便な田舎町が賑わいを見せているケースもある。ベルギーのレドュはルクセンブルクとの国境地帯のアルデンヌ高原の中にあり、やはり交通の不便な大都市から離れた小さな町であるが、高速道路で移動する途中に立ち寄った観光客で賑わっていた。経済的にどれだけ自立できているのか定かでないが、それは古書店の業態によって期待するものも違うものと思われる。

石井清輝が報告する東京・文京区千駄木の「一箱古本市」は恒常的営業を想定していない事例といえる。一般論として言えば、古書のみで経済的に成立する町と、古書を魅力のひとつと

してそれ以外の要素で経済的に成り立つ町があるように思われる。

日本で「本の町」をうたっているところに、福島県只見町と長野県伊那市高遠がある。まず福島県只見であるが、これは K 氏というやはり個性的な人物がはじめたものである。同氏は地元木材加工業者であり、家庭で不要になった本を土地（山林）と交換するという案内を新聞に掲載し、11 年間で 251 万冊の本を集めたという。この本のストックをもとに古書店の建物群を建設した。ただしこれは町の中心部から少し離れた広い土地にいくつかの建物を建てて「本の町」としているケースである。この本の町は本の在庫は膨大であるが、収集方法が一般家庭から送られてくるものだけに質が確保されているとはいえない。また客層も首都圏などから来る観光客のみで町の中心部から少し離れていることもあって、代表が地元出身者でありながら書店と地元との接点は乏しい。

高遠は直接ヘイの影響を受けている。高遠の街中にある「本の家」の代表 S 氏は東京・西荻窪で古書店を経営していたが、ヘイを訪ね、「このような町を造りたい」と西荻の店をたたんで仲間と高遠に開店したものである。まだ開業から日が浅く（2008 年 5 月開業）、「街」を形成するまでには至っていない。

日本の本の町はいずれも実質単独店舗で、「町」にはなっていないのが現状である。

4. おわりに—本の文化と地域社会

高度成長期以降の日本について郊外や出版の観点から刺激的な発言を続けている小田光雄によると、今日 CCC（カルチュア・コンビニエンス・クラブ）やゲオといった多くの読書家たちにとってその名前すらも馴染みの薄いグループがトーハン、日販という書籍流通の要となっている企業、さらに金融機関や不動産資本も巻き込んで出版文化を根本から変えつつあるという。こうした動きにはブックオフも重要な役割を演じている。再販制・委託制という日本の独特の出版事情が、古書業界の書籍流通にもかかわっている。ブックオフは単に大手のセカンドハンド本業者が出現したということにとどまらない意味を持つという。

英語圏における出版・図書流通が、さらにグローバルな展開を見せることは容易に想像できる。そうした中でブックタウン運動は、丁度スローフード、スローライフの運動と呼吸を合わせるかのように伝統的読書スタイルを支える動きのようにも見える。これはブックタウン運動のもとになった R.ブースが、反大資本の傾向を持った言辞をなしていることもそのイメージ形成に寄与しているのかもしれない。しかしスローフードの運動が単に伝統回帰の運動ではないように、ブックタウン運動も今日のヨーロッパの社会構造を背景に進展しているものである。

古書業が大規模企業グループに吸収されて伝統的な店舗形態が衰退消滅に向かうのか、それとも新しい意味を持って社会に一定の地位を占めるのか、もう少し動きを見定める必要がある。

〔追記〕本稿は本シンポジウム、日本都市学会大会報告「福島県只見町たもかくと古書の町の可能性—英国と日本における古書店街の比較社会学的研究（3）」（2007 年 10 月 26 日、愛媛県松山市総合福祉セン

ター）及び地域社会学会研究例会報告「ヘイ・オン・ワイを事例として地方町の自立を考える」（2008年10月18日、慶應義塾大学三田キャンパス）をもとにまとめたものである。

【註】

- 1) ただし古書を買入れる際には古物商の資格が必要になる。
- 2) 恒松郁生氏による。同氏は長年英国で古書店を経営して成功され、英国の古書店仲間の常識としてこのように語っておられた。筆者も日本について『タウンページ』をもとに調べたところ、東京、大阪、京都の大都市部を例外に道県単位、市単位いずれでも同様なことがいえることがわかった。大内・熊田・小山・藤田 2008、第4章参照。
- 3) リチャード・ブースほか 2002 参照。
- 4) 地元の観光案内所の 2006 年版のガイドマップには古書店 30 軒、関連業者（オークション、製本）3 軒、近在の古書店 4 軒の記載がある。
- 5) 熊田俊郎 2001、2003 参照。
- 6) R. ブースは、ヘイ・フェスティバルが大資本の側にあるテレビ局などの主導下にあることに反感を示すが、そうした点に彼の傾向が現れる。一方で自らの宣伝戦略に各種のマスコミを利用するという一面もある。
- 7) ポール・コリンズ 2005 参照。

【参考文献】

- 大内田鶴子・熊田俊郎・小山騰・藤田弘夫，2008，『神田神保町とヘイ・オン・ワイー古書とまちづくりの比較社会学』東信堂。
- 小田光雄，2007，『出版業界の危機と社会構造』論創社。
- 川成洋，1995，『世界の古書店Ⅱ』丸善。
- 熊田俊郎，2001・2003，「日本の近代化過程におけるアントルプルヌールシップ形成と福沢諭吉—地方名望家の企業活動を例として（一）（二）」『駿河台法学』15（1），17（1）。
- ポール・コリンズ，2005，『古書の聖地』晶文社（原著 2003 年）。
- リチャード・ブース、ルシア・スチュアート，2002，『本の国の王様』創元社（原著 1999）。

（くまだ としお 駿河台大学法学部）